

2009・平成21年

復習用現代語訳

西施せいし（という美女の魅力）では呉国を滅ぼすことができない。にもかかわらず後世の人々が亡国の罪を西施にかぶせるのは誤りである。もし呉王が、宰相の伯嚭はくひの讒言ざんげん（「伍胥ごしよはあなたを裏切ります」という虚偽の中傷）を信じて伍胥を殺すようなことをせず、内政を固め、外敵に備えたならば、西施はたかだか一人の侍女に過ぎないので、（彼女が絶世の美女であるにもかかわらず）彼女は何事をも為しえない。

当時の越国は王が苦難に耐え臣下ぶんしゆの文種ぶんしゆ・范蠡はんれいが秘策を実行し、恨みを忘れず、日夜呉王の隙すきを狙っていた。ところが一方の呉王ははるかかなたに遠征し、黄池こうちにおいて諸侯の上に立とうと争い、艾がい陵りょうにおいていけにえの血を祭器にぬって戦いを始め、際限なく軍を繰り出したために、平和で戦争のない時期がほとんどなかった。この隙すきをついて越軍が呉に侵入し本拠地を壊滅させたのである。このような事情なのでたとえ西施せいしがいなくても、呉の滅亡は必至ひっしであった。

いま呉の亡国を考察すると秦の苻堅ふけんと同類に思われる。もちろん、淫乱と聡明について苻堅ふけんと呉王では多少異なる。しかし秦の滅亡は晋しんの討伐に失敗したためであり、呉の滅亡は内政をおろそかにして遠征を続けたためであり、亡国に至るまでの両者の道筋は一つである。かくして私は知る。「優れた兵器は自分を傷つけ」「遠くを攻める者は近くを忘れる」という昔からの格言は決しておろそかにしてはならないのだ。

※訳注

1 淫乱↑荒淫…注11「酒色」と異なる

2 おろそかにしてはならない↑他のものに取り替えてはいけない↑

易かふべからず

音読用書き下し文

西施せいしよ能く呉ごを亡ぼすに非ざるなり。而るしかに後世こうせい 亡国ぼうこくの罪もつを以て之を西施せいしよに帰きするは、過あやまり。使もし呉王ごおう 宰嚭さいひを信じて伍胥ごしよを殺さず、内うちは国政を修め、外そとは敵人に備へば、西施せいしよは一嬪嬙いちひんしやうのみなれば、何をか能く為さん。当時句踐こうせんの堅忍けんじん、種しゆ・蠡れいの陰計いんけいを以て、臥薪嘗胆がしんしやうたんし日ひびに其その後うしろを伺うかがふ。而るしかに乃すなはち乃なちなちなかえつて遠く数千里に出で、長ちやうを黄池こうちの間かんに争まひ、鬻きんを艾陵がいりやうの上かまに搆しへ、師しを窮きはめ武ぶを黷けがし、殆ほとん

ど寧歳無し。越人其の空虚に乗じて其の巢穴を傾く。此れ即ひ西施無くとも、豈に亡びざる者有らんや。吾呉の亡ぶるを觀るや、秦の苻堅と相類す。二君の荒淫と精明とは固より年を同じくして語るべからず。而れども秦の亡ぶるは晋を伐ちて潰ゆるを致すを以てし、呉の亡ぶるは境を越えて内救及ばざるを以てす。其の轍は一なり。然る後に「佳兵は自ら焚き」て「遠きを攻むる者は近きを遺る」、元龜・格言の必ず易ふべからざるを知るなり。

1 4行目：「臥薪嘗胆」 「臥薪嘗胆」は「皮膚を痛める薪の上に寝て（臥し）、苦い胆を嘗め、そのたびごとに相手に対する恨みを忘れない」という四字熟語で、本文での意味は「復讐のための苦痛に耐えること」。『十八史略』では越王に父を殺された呉王が「臥薪」、その呉王に負けた越王が「嘗胆」となっているが、ここではないずれも越王の行為である。

2 6行目：「哉」と読んでおく。読まなくともよい。

3 8行目：出題者は「晋を伐ち潰ゆる」と読んでいるが、意味がわかりやすい訓読になるので「晋を伐ちて潰ゆる」と読んでおく。

寸評 「今の世はまちがっている！」と叫んで常識を批判し、自説を

主張する論文の典型。

解説

【筆者の主張をつかむ】

ステップ1 最初の2行を見る

「西施せいし…呉ごを亡ほろぼすにあらざるなり」。筆者の主張は最初と最後に来るので、冒頭のこの文は筆者の主張だ。

傍線Aは読めないが、「世」があるので、「今の世はまちがっている！」により、ただちに問2の選択肢を見る。

問2（全） すると、「世はまちがっている」というポイントだけで次のように選択肢がしぼられる。

世はまちがっている

(ii) 解釈 ④ 世…間違っている

(i) 書き下し文 ①③世…過あやまり

(ii) 解釈④ 「呉の国が滅んだのを西施のせいにするのは」により、(i) 書き下し文の正解は① 「亡国の罪を以て之これを西施に帰きするは」だろう。そこで、

次に、「対比に注意！」により問2の正解候補を使って、1行目を対比で整理すると、次のように論理はぴったし。

筆者…西施が呉を滅ぼしたのではない

⇕対比

後世…呉の滅亡を西施のせいにする

→

後世（の人）はまちがっている！と筆者が非難

「今の世はまちがっている！」の「今」が傍線Aにないが、「後世」が「今」に相当する。後の世の人の判断がそのまま今の世の常識となっており、その常識を筆者が批判しているのだ。

一問解けて3分が経ち、筆者の主張の一部「西施が呉を滅ぼしたのではない」もわかった。これで十分。これが大事。

問3

(ア)〔漢〕疑[？]〔注〕

「何をか能く為^よさん」とその前を訳す。「耳^{のみ}だけ」、「能^{よク}できる」

「何をか」は疑問、「嬪嬙^{ひんしょう}」は注4「王に仕える宮女」なので、次のようにして(ア)の主語が西施とわかる。

訓読…西施は一嬪嬙^{ひんしょう}のみなれば、ア何をか能く為さん

訳1…西施は王に仕える一宮女だけなので、彼女はア何ができようか？

訳2…西施は王に仕える一人の宮女にすぎないので、彼女にア何ができようか？

機械的直訳の訳1を修正して訳2を用意したが、訳1の段階でも

正解には至る。

(イ)〔注〕〔対比〕

注1を見ると、呉と越の戦いだとわかるので、対比されているのは呉王と越王句踐^{えつおうこうせん}。この対比に頼って第二段落の最初から二重傍線イまでを整理すると次のとおり。

○呉「もし呉王が…ば、西施は…何ができようか。」

○越「当時（越王）句踐の堅忍…をもって…（イが）其の後をうかがう」

ここで「後」の熟語を考えて「背後」の「後」だとわかると次のように考えられる。

イが 其の背後^そをうかがう

=

越王が 呉王の背後^そをうかがう

(イ)の主語が越王句踐だとすると正解は③となるが、慎重を期すため、次に進む。

(ウ)〔対比〕

対比に注意しながら読み進むと次のような対比が登場する。

X ウが 「遠く数千里に出で、代表の座を争い^{注7}」

⇕

Y 越人が 「其の空虚に乗じて其の巢穴を傾く」

ここで、「遠く数千里に出」たのが呉王だとすれば、呉国には王がないのだから「其の空虚」は「呉王の空虚（不在）」^{すき}。その隙をつ

いて越王が呉国を滅亡させたとなれば、論理はぴったし。そこでウの主語は呉王となり、正解は間違いなく③。

問1 「熟」 (1)

1 熟語にする

「寧^{ねい}歳」の「寧」を熟語にすると「安寧^{あんねい}」であり、「安寧秩序」という四字熟語もあるから正解候補は「治安^{しぜん}が改善された」①。また174によって「安」をもうひとひねりすると

「安寧」
←「平安」
←「平和」

なので「平和で戦争のない」②。

2 正確な訳か？

①の「治安が改善された」は治安の「改善」にとどまっているだけなので、完全に治安が確保された、完全な「平安・安寧・寧」とは言えない。①は治安の程度の差を利用した巧妙なヒツカケ選択肢。

「平和で戦争のない」②は完全な平安・安寧なので、「寧」の正確な訳だ。これが正解。

①にひっかかってしまったら、

正解は 正確な訳で作られる

という原点に帰ろう。

(2) 上下ほぼ同じ意味の熟語を作るだけ

「相類」の「相」の熟語は「相互」「相似」なので正解は③の「互いに似ている」。「類」の熟語が「同類」なので④の「意見を同じくする」もありうるが、「意見を」が原文にないのでキズ。

問4 「主張」〔注〕

① 「呉国の滅亡原因は西施ではない！」と主張する筆者に対し、問2により「呉国の滅亡原因は西施だ」とするのが後世の通常の見解。そこで①「呉の滅亡は呉王に…求めるべきという従来の見解」は、「従来の」がキズ。

② 「越の軍隊を攻撃するために、呉がひそかに力を蓄えていた」が問3（イ）によりキズ。「ひそかに力を蓄えていた」のは越だった。

③ ③は注7「（呉王が）他国の諸侯と…争う」により「呉と越の戦い…が長年…繰り返されていた」がキズ。

④ ④は、「呉の首都を『巢穴』に喩え…呉を滅ぼすことは小動物を捕えるように容易…」として、「巢穴」にいるのは小動物だと決めつけている。しかし、「巢穴そうけつ」には大きな熊や凶暴な虎もいる。そして熊や虎を捕えるのは決して「容易」ではない。

⑤ ⑤「仮定形」は原文「即たとひ…とも」、⑤「反語形」は原文「豈あに…んや」、⑤「呉の滅亡に対する従来の見解を否定し、筆者自身の意見を強く主張」は問2の作業により正しい。よって⑤が正解。

問5〔注〕

説明・注で正解つかめ！¹⁷⁶を使う。問5の説明「呉王と苻堅の歩

んだ道は同じであった」を利用して8行目「而れども」以下を読んでみると、次のとおり。

○秦の亡ぶるは晋を伐ち潰ゆるを致すを以てし、

○呉の亡ぶるは境を越えて内救及ばざるを以てす。

○呉王と（秦の）苻堅の歩んだ道は同じ

すると、両者の「亡ぶる」原因はいずれも「(国)境を越えて他国(晋)を伐」ったからであり、正解は、④の「他国を侵略」か⑤の「他国に遠征」。④は、「有能な人物を殺害」が秦の苻堅にないのと、「(他国)で大敗」が呉王にないという二点がキズ。あせっていてもどちらかには気づくだろう。

なお⑤の「自国の危機に気付かなかった」は秦の苻堅にないのでこれもキズだが、出題者は注11で「荒淫」を説明して「酒色における」としている。大酒を飲んで女の子のお尻(色)をおっかけまわしてばかりいれば、政治が乱れ自国が危機に陥るのは当然。したがって秦の苻堅についても、⑤「自国の危機に気付かなかった」ことになる。

こうして⑤が正解となるが、受験生は深読みすることなくキズの少ない方を選んでおけばよい。

問6 (注)主張

1 説明・注で正解つかめ！¹⁷⁶で訳す。

問6の説明文で「引用」とあるので、傍線Cの直前で引用されている「佳兵かへい（優秀な兵器）注は自らみずかを焚やく」・「遠きを攻むるは近きをわすれる」という二つのことわざを訳すと次のとおり。

優秀な兵器は 自分を焼く

遠征攻撃すれば 近い〇〇を忘れる

ここで、「近い〇〇＝自分」しかありえないので、二つのことわざを合わせると正解候補④になる。

優秀な兵器で 遠征攻撃すれば

近い自分＝を忘れて 焼く

④軍事力を…行使すると…自滅

2 説明・注で正解つかめ！で選択肢を確認する

④の「軍事力を安易に行使する」の「安易に」は、注9「軍隊を頻ひん繁ばんに出動させ、兵力を濫用する」の「頻繁出動・兵力濫用」に相当する。よって正解は④。

自信がなければ、次の手もある。

3 筆者の主張で確認する

筆者の主張は、9行目の「優秀な兵器で遠征攻撃すれば、近い自分を忘れて焼け死ぬ」という格言であり、これが全文最後で「易かふべからず…変えてはいけない（原則だ）」と強調されている。

「早読みは 最初と最後に 主語述語」により選択肢の主語・述語だけを読んで消去すると次のとおり。

①「^{主語}呉国の滅亡は…^{述語}王の…資質(能力)にその原因があった」とするが、筆者の主張する滅亡原因は「遠征攻撃」であって王の統治能力ではない。

②「^{主語}呉国の滅亡は…^{述語}越王の策略による」とするが、筆者の主張する滅亡原因は敵の策略ではない。

③「^{主語}強大な軍隊を維持し続けることは…^{述語}困難」とするが、筆者の主張は「遠征攻撃すると自国が滅亡すること」であり、「軍隊維持」ではない。

⑤「^{主語}呉国の滅亡は、^{述語}容易には理解できない深遠な理由に基づく」とするが、筆者は「優秀な兵器による遠征攻撃」こそが国の滅亡原因だと明確に主張しており、「容易に」理解できる。

以上の作業を要約すれば左の如し。

ヒガケは 主張をずらして作られる 1691